

令和5年12月16日

北関東フォーラム

於：シムックス

中斎塾 北関東フォーラム

令和5年度 第11回

一年を振り返る

今年最後の北関東フォーラムです。ただいま岡本理事長が開会挨拶で、「コロナ禍を経験して、新しい時代に新しい中斎塾フォーラムがスタートできるように」と言われました。実際に3年経ってみて、やはり変わりましたね。変わるということは、一気に変わることと、ゆっくり変わることがあります。3年かけることによって、だんだん新しいスタイルが生まれ定着してきたと感じます。これは、新しい時代の幕開けになるなと思います。今日は、新しい時代に向けてのものの考え方もお話できれば良いなと思っております。

論語から参ります。今回選んだテーマは「君子」です。論語の中に「君子」という言葉がこれほど多かったかと、改めて感じています。全部お話できないので、11月と12月の2回に分けました。まず、前回のおさらいを致します。レジュメをご覧ください。

前回は A. 君子の意味として、5つの視点を取り上げました。

- 1、「君子」という言葉を孔子がどのように使っているか。孔子が考える「君子」
- 2、お弟子さんたちが孔子その人を「君子」と表現している
- 3、孔子から見て立派な人格者、理想的な人物として捉えている
- 4、一般論として捉えている
- 5、君主の条件として捉えている

前回は3、立派な人格者まで解説しました。その中で印象に残っているのは、⑦の「孔子曰く、君子に三戒あり」という文章です。これは少・壮・老について言っています。少年の頃は、男性であれば女色を戒める。異性をあまり気にし過ぎない。壮年になったら、争う気持ちをなるべく抑えなさい。老年は、地位・名誉・財産といった欲をほどほどにこなさいという内容です。

孔子の時代で言うと、「少」はだいたい20代、「壮」は30代、「老」は50代とされますが、現代であればこれに20年足して考えると良いでしょう。ですから、「少」の女色を戒めるのは40代です。40代は「不惑」ですから、色に力点を置いてはいけません。「壮」

の闘争心を戒めるというのは50代。「老」は、今の50代は老いたる者という感じはありませんから、プラス20で70代です。70代になったら初めて「老」と捉えてよかろうと思います。ちなみにこの「三戒」は、佐藤一斎の言志四録にも取り入れられています。

前回のおさらいをしたところで、少し脱線を致します。

先週は詩吟の大会があり京都に行きました。新年の四季だよりに載せる写真を撮ろうと思って清水寺に行きましたが、参道には観光客がひしめき合っていて、それこそ韓国の雑踏事故を思い出しました。とても先に行かれないと思って参道からちょっと外れたら、まるっきり人がいないのです。人の気持ちとはおかしなものだなと感じました。安岡正篤先生の言われる「人妖」、即ち人の気持ちの中に住む妖（あやかし）によって誘導されるという意味ですが、まさに参道にひしめき合っている観光客は、人妖の類であるという印象を持ちました。参道からせいぜい10メートルくらい外れただけで、これほど人がいないとは・・・言い方を変えると、メディアに誘導されて人がこれだけ流れている。メディアに誘導されないと人は動けないのか、という印象を持ちました。

今年一年を振り返ると、メディアは実に活躍をしました。というのは、政府の付度をし、自分たちの木鐸という使命を何処かに置きやってしまった。政府の思う方向に国民を誘導しようとした一年間であったと思います。

それからメディアについてはもう一つ、メディアの中で中国の三戦を連想させる報道がどれぐらいあったか、今現在どうなのかと考えました。三戦は、フォーラムで何度もお話ししています。一つは、中国が他国に戦争を仕掛ける場合、その国の人たちが我々とはとても勝てるわけがないと心理的に萎えさせる心理戦。二つ目は、世論を誘導する世論戦。これに関してメディアは大変な力を発揮しています。中国は、台湾を完全に合併する、いわゆる台湾有事の意図を今年一年ずっと出し続けました。その結果、日本国内では中国が台湾を攻めるのは既定の事実と思うようになってしまっています。これは中国がしかけた三戦の大きな成果であろうと思います。三つ目は、それらを裏付ける上での法律戦。これも中国は自分の国の中での法律をしっかりと作って、三戦を大いに進めています。

これらの考えが、清水寺を外れ人気がない所に行って、瞬間的にすぐ浮かんできました。押すな押すなの人混みにいると、こういう考えは生まれなかったと思います。ですから我々も、誰もいない所で自分ひとりで今年一年を静かに振り返ってみる。今月も残り少ないですが、そういう時間をお持ちになるとよろしいでしょう。今年は人の考えで動かされていたのか、それとも自分自身の考えで動いていたのか、そこら辺を考える必要があります。

今年一年の国の動き・社会の動きを見ると、値上げラッシュが酷かったですね。最近是企业も反省した所がだいぶ出てきたようで、二通りの値下げが起きています。一つは、どんどん値上げをしたらお客さんが買ってくれなくなってしまったので、お客さんと呼び戻そうということで値下げをした。もう一つは先々を見通して、商品の値段を安くします、或いは安くしたというPRです。

値上げの中身を見ると、本当に上げざるを得なくて値上げした所と、便乗値上げをした所とあって、酷いものだと思います。お弁当ひとつを見ても、最近はどんどん上げ底になっています。しかも中身が少ないのに山盛りになっているように錯覚させる弁当がなんと多いことか。これは商売として良くないと私は思っていますが、もう上げ底が当たり前になったなという印象で一年が終わります。

仕事も同じです。例えば建築関係では、見積り期間は3ヶ月間というのが多かった。今は、2ヶ月間とか1ヶ月しか有効期限がありません、酷いところは1週間で返事を下さい、その後は値段が上がります・・・という話を聞きます。これもやはり上げ底ですね。本当の仕入値が変わるからというわけではなく、目先の上げ底をした。他の仕事でも同じようなことが言えます。

ということで、一年間を振り返る時、自分自身の専門分野をよく見て、尚且つ人と話をせず自分自身の心の中を深く見つめて考える。これが必要な時期です。六中観に「忙中閑あり」とあります。じっくり考え自分自身を見つめ直す時間を持つことが大事です。年内残りの間で、自分自身のやってきた内容をよく考えて、上げ底をしなかったかどうかお考え下さい。

論語における「君子」とは

では、素読を致します。今日は、レジュメのA-4からです。

4、一般論

⑧ 君子は紺緹を以て飾らず。紅紫は以て褻服と為さず。暑に当りては袷の絺綌す。必ず表して之を出す。

(憲問第十四・45)

ここは、天命を理解している理想の人物という君子よりは、一般論としての君子という感覚で読みましょう。

君子は、普段着に神事の時の紺色や喪に入る時の淡紅色で襟のふちどりをしない。女性が使う赤や紫色は使わない。暑い時は葛布の単衣の上着を着るが、必ず下着をつけて肌が透けて見えないようにする。

・・・君子は身だしなみをきちんとしましょうということです。見るからに君子らしい服装をするように、という意味合いで受け止めて下さい。

5、君主

⑨ 周公魯公に謂いて曰く、君子は其の親を施てず。大臣をして以られざるを怨ましめず。故旧は大故無ければ、則ち棄てず。備わることを一人に求むる無しと。

(微子第十八・10)

周公が魯の国に赴く息子の魯公に、君主たるものは君子でなければいけないと心構えを言っています。

君子は親族を見捨ててはいけません。

・・・お前が魯国に行ったなら、付いてきた親族を大事に下さい。

大臣の中で能力が発揮出来ずに用いられないとしても、あとに恨みを残さないように上手に使いなさい。

先祖代々からの家臣は、とんでもない失敗をしない限り見捨ててはいけません。

一人の者にすべてを求めてはいけません。

・・・これは有名な科白です。一人の人間に100%を求めてはいけませんということです。今はどこの会社でも人手不足ですから、人を採用する時、以前は100%の人間が取りたいところからどんどんハードルを下げて、50%ぐらいの能力でも採用せざるを得ない。どうにもならないなと思っても、我慢してよく教え込んでやるしかない。そういうご時世になったようです。

B 孔子が弟子に君子の意味を話す時、誰に話したかによって違う

孔子がお弟子さんたちに君子はこうあるべきだと教える時、相手によって話の仕方が違うわけですね。お弟子さんによって、君子の考え方はまるで違うものが見えてきます。

1. 子路

① 子路 君子を問う。子曰く、己を修めて以て敬すと。

(憲問第十四・45)

子路が孔子に、「君子になるにはどうしたらいいですか」と聞いたので、孔子が「お前は少し雑駁だから、自分自身を磨きなさい。そして言動を慎み深くしなさい」と答えました。

続けて子路が「それだけでよいのですか」と言うので、「理想の君主であった堯・舜ですら実現することが難しかったのだよ（お前がやろうとしてもそう簡単にはいかないぞ!）」と諭した問答です。

② 君子も亦 窮すること有るか。

(衛靈公第十五・1)

孔子一行が陳という国に入った時、(陳は呉に責められて国が乱れていた) 囲まれてしまい食料がなくなっていました。お供の弟子たちは立ち上がる元氣もなくなってしまう時、子路が孔子に向かって、「先生のような君子でも困ることがあるのでしょうか」…何か打開策はないのですかと問い詰めたという状況です。

対して孔子が、「君子でも困窮することはある。小人物であれば心が乱され、やけくそになって悪事をするものだ」…君子はそういう場合でも乱れない、と返事をしています。

子路は孔子に対してよく文句をつけるお弟子さんですから、弟子と孔子とのやり取りが実に楽しいですね。それに対して孔子は当意即妙で答えています。孔子と子路の良い子弟関係が伺えます。

2. 子貢

③ 子貢曰く、君子の過は、日月の食の如し。過てば人皆之を見る。更むれば人皆之を仰ぐ。

(子張第十九・21)

子貢は口八丁手八丁で、言葉も非常に巧みなお弟子さんです。子貢から見て、孔子は君子なのだという事を明言した部分だと思います。

子貢が言うには、君子(=孔子)の過ちは日蝕・月蝕のようなものと考えればよい。君子は間違いをしても隠そうとはしないので、誰もがそれを分かる。また君子は間違いをすぐ直すので、皆がそれを仰ぎ見るのである。

・・・「孔子は失敗しても隠さない」と言っているということは、子貢は隠すことがあったのだろうと思わせられるところです。

子貢が、孔子は君子と呼ぶに足りる人物だと理解していると捉えて下さい。

3. 子夏

④ 子夏に謂いて曰く、女君子儒と為れ。小人儒と為ること無かれと。

(雍也第六・11)

孔子が子夏に対して、「お前は小さな人物が身に付けるような小人儒にはなってはいけない。ゆったりと落ち着いて貴族が学ぶような君子儒を覚えなさい」という言い方をしてい

ます。

子夏は文学・学問に詳しいから横の学問には長じているのだろうと思いますが、縦の学問がちょっと少ないのではないかと推測できる部分です。

4. 曾子

⑤ しいわ 子曰く、くんし 君子はぎ 義にさと 喻り、しょうじん 小人はり 利にさと 喻る。

(里仁第四・16)

君子は正しい道理ではとつするが、小さい人物は欲につられて動いてしまうものだ。

・・・君子はそういうことがあってはいけないという話です。何か問題が起きた時、どういう判断をするかで君子か小人かの道が変わって来ます。

ちなみに渋澤栄一は晩年、子供たちに向かって「私が儲けようと思ったら、三井三菱に勝るとも劣らなかつただろうが、意識してそれはやらなかつた」と語ったそうです。実際に渋澤栄一は、日本の国に必要な会社だと思えば、引き受け手のない株であっても、その会社を潰さないために株を買っていました。その会社が大きくなって、若干の財が残ったわけです。義に喩った渋澤栄一の対処法が分かります。

⑥ しいわ 子曰く、しん 参やわ 吾がみち 道はいつ 一 もつ 以てこれ 之をつらぬ 貫けりと。そうし 曾子曰く、い 唯と。しい 子曰く、もんじんと 子出づ。
い 門人問いて曰く、なん 何のいい 謂ぞやと。そうし 曾子曰く、ふうし 夫子のみち 道はちゅうじょ 忠恕のみと。

(里仁第四・15)

孔子は、自分の学問を継ぐのは顔回だと思っていました。その顔回が早死にしまい、天は私を滅ぼしたと嘆き悲しんだという話があります。結果として、曾子が孔子の道を継いだわけですが、それを暗示するような文章です。

孔子が弟子たちの前で「参（曾子）や、私は生涯ただ一つの思いを貫いたのだ」と言いました。曾子がにこっとして「はい」と頷いたのを見て、孔子は満足そうに退席しました。

弟子たちは曾先生と孔大先生の話の中身が分からないので、「孔大先生の言われたことはどういう意味ですか」と聞いたわけです。そこで曾子が「孔先生の一生涯をもって貫いた道は、忠（まごころ）と恕（思いやり）だ」と答えました。

・・・その考え方が孔子の道で、現在までずっと続いているとお考え下さい。

C 弟子たちとの会話・弟子と他者の会話

最後に、弟子たちの会話、それから弟子と一般の人との会話の中で、君子をどう捉えているか説明されている場合です。

① 君子の道は、孰れをか先として伝え、孰れをか後として倦まん。

(子張第十九・12)

子夏と子游のお弟子さん同士のお喋りです。子游が子夏の教え方は間違っていると批判したのを子夏が聞いて、「君子（孔子）の道を教えるのに、何を先に教え何を後にするか、見極めるところから始まるものだ」と反論したという文章です。

理解度が低い弟子たちには分かりやすいことを先に教え、それから習熟度に合わせて本質的なものを教えればよい。それをよく見極めなければいけないという内容です。

この文章を何故出したかという、お弟子さん同士で話をする時、「君子（孔先生）の道は」と言っています。ですから孫弟子たちの間でも孔先生を「孔子」とは言わず、もう「君子」と言ったのだらうと捉えたので取り上げました。

② 大宰 子貢に問いて曰く、（中略）君子は多ならんや。多ならざるなりと。

(子罕第九・6)

大宰（呉の国の総理大臣）が子貢に、「何故、孔子は多芸（物知り）なのか」と聞きました。

子貢から聞いて孔子が言いました。「私は若い頃は身分が低かった。だから色々な仕事をやらざるを得なかった。君子というものは、あまり物知りではいけないなあ」

・・・結果として物知りになってしまっただけのことだよと述懐しています。

「君子は多ならんや。多ならざるなりと」は、孔子が自分のことを言ったという理解でも良いし、一般的な君子は…と諭したと受け止めても結構です。私は、孔子が自分のことを振り返って、「私は育ちが良くなかったから多芸多才になってしまった。恥ずかしいことだなあ」と言っていると捉えます。言外に「君子である私も」と言ったように捉えたので、取り上げました。

恒例の質問

では、恒例の質問に参ります。今年一年間振り返ってどうでしょうか。

- 今年は良い日が続いた方
- 今年は嘘をつかなかつたし、つかれなかつた方
- 今年は有難うと言いつけたし、言われることも多かつた方

皆さん手が挙がりました。良い人生ですね。

○ 今年はよく身体の手入れをした方

少しでもやったなと思ったなら、遠慮せずずっと挙げるとよろしいですね。

○ 今年は自分磨きをよくやった方

○ 昨晚眠る時、来年は良い年だったなと思って寝た方

今年は良い年だったなと思って寝た方はどうでしょう？ 今年は良い年だったかは大晦日に考えれば宜しいわけで、来年は良い年だったなと思って眠ることをお勧めします。

令和5年～令和6年（甲辰）を考える

・繁栄か没落、岐路の年

今年は間違いなく没落しました。私は、今年は岸田政権が終わると思っていましたが、よく持ちましたね。岸田さんは解散総選挙をしたら総理大臣を退かねばならないと思ったから、解散出来なかったのです。まだ、あと何日かあります。安倍派に火が付きまして。新聞の見出しは「安倍派5人組、一掃」と、酷い見出しを付けるものだと思います。

それにしても政治家は醜悪です。悲しいを通り越して、見るに耐えません。何たる無様な姿を師走に晒したのかと思います。それに引き換え、大谷翔平選手の爽やかな笑顔は良いですね。藤井八冠も良い。ああいう若者がどんどん出てくるのは良いなと思います。

岸田さんが無様だと思ったのは、官房長官更迭の話が出た時です。その時、読売新聞の見出しには「官房長官更迭なし」と出ていました。東京新聞は「更迭」と断定していました。日経は「更迭かもしれない」でした。同じ情報でまるっきり違う見出しが飛びました。

その後、岸田さんは官房長官の後任探しをしたけれども、見つからない。次々に何人もの人から断られてどうにもならなくなり、岸田派のNo.2、自分の寝首を掻くかもしれないと思って更迭した林さんを官房長官にせざるを得なかったというわけです。

なんとも無様というか醜悪だなと呆れました。こういう国が発展するわけがない。没落したのは間違いなしで、没落した証拠は、来年どっと出ます。色々な所で酷い数字が出てくるでしょう。

・コロナは死亡しないことが肝心

皆さん方は死亡しないで済みましたから、非常に良かったです。

・今年は騙されないように

騙された方は沢山いると思いますが、騙されたことに気がつかない人が沢山いる。大変

おめでたい年回りだったと思います。

今年を踏まえて、来年のことを少し申し上げておきましょう。

来年は甲辰（きのえたつ）。甲は、物事が始まるという意味です。辰は、エネルギーがたくさん溢れているけれども、あちらこちらにぶつかって、ぐんと伸びてはいきません。紆余曲折をしていく。つまり伸び悩むという年です。

日銀の植田総裁が、「年末から来年にかけてはチャレンジング」という言い方をしました。やはり慎重ですね。悪く言えば、おっかなびっくり。どっちに転がっても良いということですが、流れを見ていくと、来年は物価が高騰するのは当たり前ですし、インフレも当然のことながらどんどん上がっていく。ハイパーインフレが起きる可能性は大です。

政府がいくら賃上げを言ったところで、大企業は頑張っているけれども、大多数を占める中小零細企業はどうかというと、一生懸命身を削り何とか賃上げしても物価の上がり方には全然追いつかない。ですから実質的な目減りです。岸田政権がやっていることは、例えば、社会保険料などはどんどん上がっています。社会保険関係の中身は増税ですから、言葉遊びが過ぎます。

皆さんに調べて戴きたいと思うのは、低所得者・低所得世帯、富裕層、生活保護世帯、等々の定義です。政府は意識して定義を作っていません。最近、メディアは減税の恩恵がいかない年収2000万円以上を富裕層と言っていますが、政府が考えている富裕層とは違います。同じ富裕層という言葉でも、メディアが使っている言葉と政府が使っている言葉はまるで違う。週刊誌や月刊誌の類でも定義が違います。低所得者について見れば、245万円以下を低所得者と言ったり、100万円以下というのもあって、言葉も定義もバラバラで使われています。

これらの定義や呼び方を年末にお調べ戴いて、来年暮れにはそれがどう変わるか見て戴きたいと思います。政府の言い方はどうか、メディアはどうか。政府一辺倒のまま伝えるメディアと、政府に批判的なメディアとでは言い方が違います。最近の中流という言葉は使っていませんが、中間層という言い方は使っています。ですから上・中・下という感覚でどのような言葉が使われているかを調べて戴き、自分で納得できる。そういう年の暮れにして戴きたいし、年始にして戴きたいものだと思っております。

お時間が参りました。最後に、今年の世相を表す漢字は「税」という文字だそうです。言い得て妙ですね。税金に対して目を向けるなどは凄いことです。日本の国民が変わったと思いました。増税をすれば国が減ぶというのは歴史的な事実です。90%以上の増税をした

ローマは滅び、同じく 90%以上上げたイギリスはアメリカに覇権を渡しました。

日本も税を意識し出したので、来年この流れでいけば、日本の国が経済破綻を起こすことから免れる可能性がわずかに見えたように感じます。「税」という文字から、一筋の光明を感じました。そう申し上げて本日の講話を終了、今年の締めくくりと致します。一年間どうも有難うございました。